

「ありがとう」の言葉 直接、父に言いたかった

熊本県南阿蘇村河陽の高野台地区は、4月16日の地震で大規模な土砂崩れが発生、5人が亡くなった。自宅にいた前田友光さん（65）、同村・浄林寺門徒）も巻き込まれ、4日後、遺体で見つかった。6月9日、妻・和子さん（61）と長男の友和さん（37）、同寺の野田龍賢住職（35）とともにその現場を訪ねた。

一面に土砂

「つづが玄関…」

一面土砂に覆われ、変わり果てた自宅跡。花束を手にする和子さんは「地震後、南阿蘇村に来るときはいつも雨。1カ月の命日も雨だったの、地面がぬかるんでここまでぼって来られなかった。やっと来ることができた」とぼつりともらした。わずかに残っていた石板を見て、「こ



南阿蘇村河陽の土砂崩れ現場に立つ前田さん親子と野田龍賢住職（右）

土砂崩れの自宅跡に再び

父の植えたアジサイが



こが玄関だね」と隣にいる友和さんに話しかけた。

熊本市内で暮らしていた前田さん夫妻。病気がちだった夫のために、和子さんが内緒で15年前にこの土地を購入したという。

友光さんは自動車販売店を定年退職後、同村のゴルフ場に勤めながら、ここでの暮らしを始めた。和子さんは熊本市の自宅から定期的に訪れたという。「口数の少ない人だったが、大好きな阿蘇の自然に囲まれた暮らしを楽しんでいた。バイクのツーリングが趣味で、雲海を見るからと明け方に連れ出されたこともあった。雲海、きれいだった」と遠くを見つめた。

4月14日の最初の地震後、友光さんは和子さんを心配し、すぐに熊本市の自宅に戻った。15日夕方には友和さん家族も加わって食卓を囲んだ。食事を終え、「明日仕事だけんね」と友光さんは南阿蘇村に向かった。和子さんはおにぎりを作り、見送った。「いつもの変わらない光景だったのに…」。

翌16日未明の大きな揺れ。すぐに友光さんに連絡したが、携帯電話はつながらなかった。

土砂の間に

輝く緑色の芽

浄林寺の野田住職は南阿蘇

村で生まれ育った。「この辺りにお仏壇がありましたね。友光さんと話し、ここでの生活を楽しんでおられることがよくわかりました。ここは、移住してもらおうと村が宅地造成した所。あの高台に桜も植えられる、地元民も花見を楽しむ場でした。まさか、ここが崩れるなんて」と話した。

息子の友和さんは土砂崩れの後、すぐに駆けつけて捜索を見守ったという。再びその場を訪れ、言葉少なに父の見つかった辺りを眺めていた。和子さんは「テラスを作ったり、庭木を植えたり。アジサイが好きでたくさん植えていました。きれいに咲くのを楽しみにしていたのに」と話

した。アジサイを植えた場所に目を移すと、焦げ茶色の土砂の合間に、小さな緑色の芽が出て、輝いていた。アジサイだった。

和子さんは近付き、「お父さんが私たちが来るのを待っていてくれたみたい」とほほ笑んだ。「こが玄関だから、この辺りがリビング。ここに寝そべってテレビを見ていたね」と涙ぐみながら、「リビング」に花束を手向けた。

掘り出したアジサイを手に友和さんは「厳しくて、こわい父親でした。たくさん怒られ、殴られた記憶しかない。でも…」と、その肩が震え始めた。

今、再び父の愛情をかみしめる友和さん。「父には感謝しかない…本当は、本当は生きていたうちに、『ありがとう』と言いたかった」。大粒の涙があふれた。